

質問、発問をめぐって

2014.5.9 藤川大祐

open question と closed question

- Yes-no 質問 例「スイカは野菜ですか？」
- A or B 例「スイカは野菜ですか、果物ですか？」
(A、B以外に、「AかつB」、「AでもBでもない」がありうる。)
- 三択など、限定された選択肢から選択。
- 一定の尺度で比較。 例「A、B、Cの3つの物体のうち最も重いのは？」
- 「何？」「誰？」といった特定の名詞、固有名詞を問うもの。
- 「どのように？」「どうすれば？」「～の説明は？」「～の定義は？」など、一定程度複雑なことから問うもの。
- 「どうして？」のように、根拠を問うもの。

同様のことを問う場合にも、答えの範囲を変更し、答えやすさを調整することが可能。

問いの前提

- 教材「それがしは／かかしにて候／雀どの」についての発問「いばっているのは雀ですか、かかしですか」の前提、「雀かかかしのいづれかがいばっている」。二者択一の問いだが、前提を疑う／否定する回答がありうる。
- 質問者と回答者との間で前提が共有されていない場合、質問に答えることは困難。
- 前提を明示することによって答えやすくなる。例「われわれの生活に重要な関係のある電気は、あるものの力を使って発電しています。どんな力を使って発電しているのでしょうか。」
- 「どうしてAでしょうか？」は「どうしてBでなくAでしょうか？」を問うていると考えられ、Bという考え方が可能であることが共有されなければ、問いとして成立しない。例「歌志内市はどうして市なののでしょうか？」

参考 藤川(2011)、発問とその前提-発問の論理に関する考察-
<http://ace-npo.org/fujikawa-lab/bulletin.html>

日常の質問と教師の発問

日常の質問は、答えを知らない者が知っているであろう者に問う。

例 「駅へはどう行ったらよいですか？」

授業における教師の発問は、答え(正答)を知っている者が知らない(かもしれない)者に問う(教師の談話分析より)。

例 「主人公はどんな気持ちでしたか？」

教師の発問はクイズに近いものであり、ともすると授業は教師の意図する正解を推測するゲーム(Guessing Game)となってしまう。

学びの真正性(authenticity、ホンモノ性)をいかに取り戻すかが課題となる。

参考 藤川(1991)、教師の発問方略の研究 <http://hdl.handle.net/2261/622>

発問の定石化

- 「教育技術の法則化運動」において話題に。例：有田和正の発問「バスの運転士さんはどこを見て運転していますか？」
- 斎藤喜博の実践への批判
- 宇佐美寛「知覚語で問え」
- 岩下修「ゆれのないモノ」(岩下『AさせたいならBと言え』明治図書、1989年)

物—マシュマロを1個想像します。そのマシュマロをかまらずに、しかも形を変えずにのみこんでごらん。

人—1組は岩下先生のいる所から、2組はM先生のいる所から、水に入ってください。

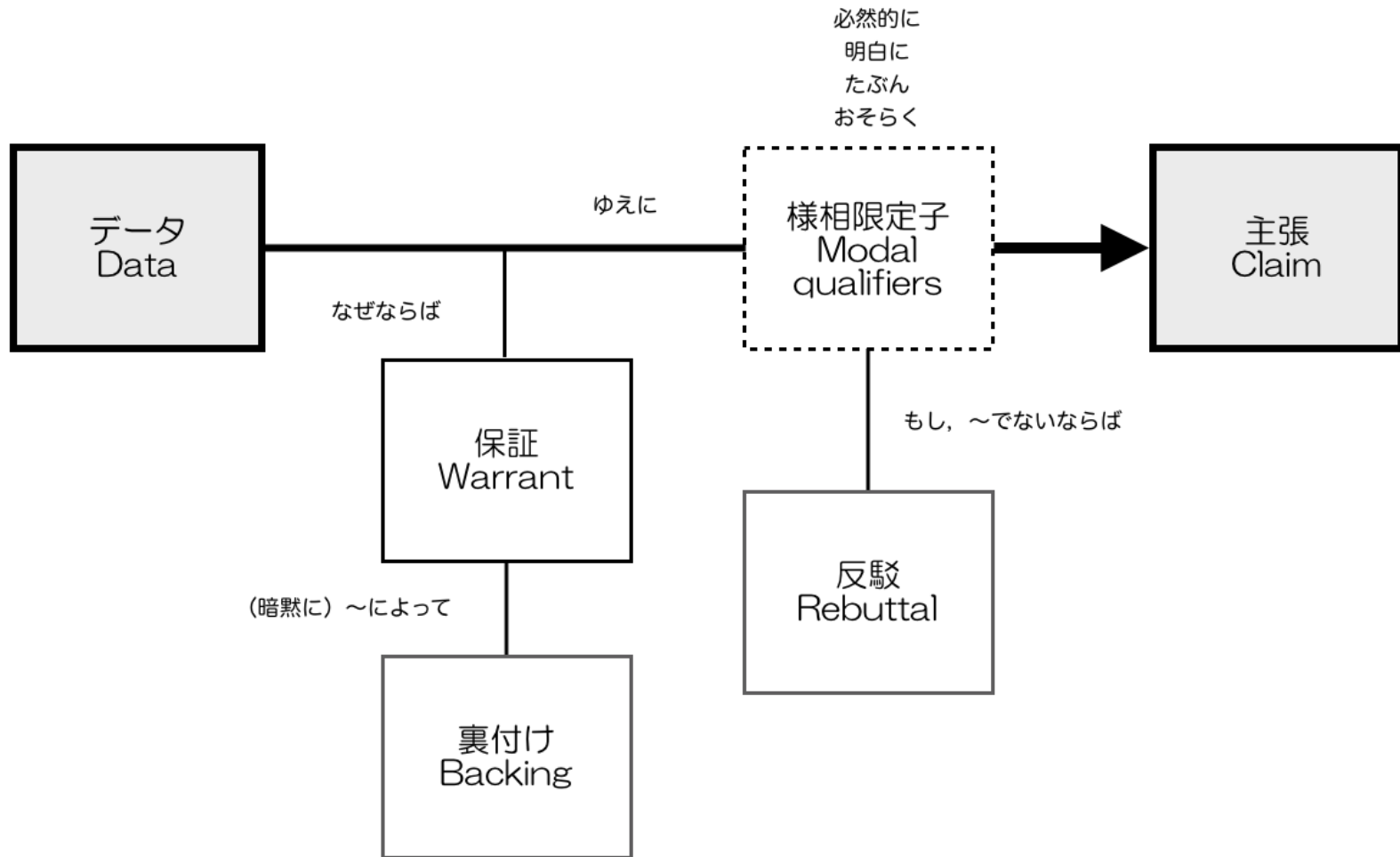
場所—京都の中で、一番よかった場所を言ってください。

数—ノートにコンパスで円をかいてもらいます。1ページの中に10個かいてください。

音—「前回り」をした後、誰が一番音をたてないで降りるか競争です。

色—けやきの「緑」がきれいです。見えますか。

議論のToulmin model



コリンズの発問ルール

- ソクラテスの問答法を、どのような場合にどのように使うのかを示したもの。

例 ルール2: 要因をたずねる。

もし、

(1) 子どもが、〈ある事例においては従属変数がある特定の値をとる〉と主張する。

ならば、

(2) その子どもになぜかと問う。

具体例: もし子どもが〈中国では米が育つ〉と言うならば、なぜかを問う。

使用の理由: これによって、子どもがどんな要因あるいはつながりについて知っているかが明らかになる。

(出典) Collins, A. (1976) Processes in Acquiring Knowledge. <http://oai.dtic.mil/oai/oai?verb=getRecord&metadataPrefix=html&identifier=ADA020270>

(参考) 藤川(1988) コリンズの発問ルールをどう使うか(東京大学教育学部教育内容研究室『教育内容研究』第6集、pp.3-19)